

激動の歴史を新しい視点から学ぶ日本の近現代史 第一次世界大戦と米騒動

<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>

I、はじめに～「欧州の大禍乱は大正新時代の天佑神助」（井上馨）

1、第一次世界大戦（1914～18）とは

1914年6月、サラエボ事件がきっかけに、英・仏・露を中心とする連合国(協商国)とドイツなど同盟国の間で発生、日・米・中など30以上の国が参戦する世界戦争となった。膨大な兵員・兵器が投入されることで、各国は総力戦を余儀なくされた。

1917年にはロシア革命も発生、そこから派生した革命干渉戦争（シベリア戦争）も起こる。

1918年11月ドイツの降伏で終わった。

2、日本の参戦（1914年8月8日決定→23日宣戦）

- ①イギリスの依頼と取り消し→英の判断の揺れ
- ②大隈内閣・加藤高明外相の参戦外交と、元老・政友会などの反発
 - ・中国進出への好機
 - ・強引な手法への反発・他の列強（とくにアメリカ）への配慮
- ③山東省・膠州湾の攻略⇒11/7占領、南洋群島の占領

II、なぜ「大戦は天佑」だったのか(1)～桂園時代から大隈内閣まで

1、桂園時代～妥協と暗闘の時代

古い勢力＝藩閥・官僚勢力と、衆議院・政党との妥協

2、「国民」の不満～重税への怒り

不況の深刻化とさまざまな要求の交差…債務縮小、減税要求、積極財政、軍備拡張

3、第一次護憲運動と大正政変

- ①陸軍の横暴に対する反発→護憲運動＝民衆運動と政党政治の結合、桂内閣崩壊に
- ②新しい時代＝「大正」を印象づける＝民衆の力で内閣を倒した。天皇の権威の低下

4、山本権兵衛内閣（1913～14）…政友会に支えられた薩摩閥・海軍閥内閣

反藩閥の民衆の不服、長州閥の怒り→シーメンス事件で崩壊

5、第二次大隈重信内閣（1914～16）

第三次桂内閣の閣僚を中心とする政党（立憲同志会）内閣

「陸軍・海軍・政友会・貴族院の四大勢力がすべて政治的に傷つくという真空状態で生まれた」

◎大隈内閣（元老の求める）の役割

- ①力を持ちすぎた政友会の「退治」
- ②財政難の解消と軍備拡張（二個師団増設など）の実現
- ③満州問題の解決

III、なぜ「大戦は天佑」だったのか(2)～対中国政策の混乱

1、日中間の最大の懸念事項＝満州における利権延長問題

- ①遼東半島先端部（関東州）の租借権→1923年まで
- ②南満州鉄道の長春以南と付属地→1939年まで

2、アメリカとの対立の深刻化

- ①門戸開放政策（1899・1900）…中国の「門戸開放」「機会均等」「領土保全」を主張
⇒経済的優越を背景に自由競争で中国市場制覇を旨とす＝中国ナショナリズムとの協力も
- ②南満州を門戸開放のモデル地域に⇔日本の拒絶
 - ・1905桂・ハリマン協定…南満州鉄道の共同所有→小村外相の猛反対で白紙撤回
 - ・1909「満州中立化」案の提示→日露協約＝日露両国による満州の勢力圏分割で対抗

3、中国ナショナリズムへの列強の対応

- ①アメリカ…列強による中国分割に反対、ナショナリズムに「好意的」（＝経済力で優位に）
- ②イギリス・フランス…列強間の協調により既得権益を維持、ナショナリズムへの妥協
- ③帝政ロシア・日本…独占的な既得権益の堅持、拡大、ナショナリズムに敵対的・取締強化要求
- <④ソ連…ナショナリズムを援助「指導」・帝国主義体制と対抗>

4、対中「外交」の分岐

- ①元老ら保守層・原敬など政友会主流＝欧米との協調を重視⇒明確な展望を出しにくい

- ②陸軍主流・外務省主流・加藤高明など立憲国民党＝日本の立場を主張、利権確保を最優先
「アジア・モンロー主義」論＝欧米勢力の排除⇒辛亥革命の混乱に乗り軍事行動も計画
- ③もう一つの道＝石橋湛山らの「小国」論も⇒植民地放棄・アジアとの連帯

IV、大隈・寺内内閣と中国～第一次大戦の中で

1、「天佑神助」としての第一次大戦

- ①列強の目が大戦に集中⇒中国との懸案の解決と独占的進出の好機、アメリカとの関係は？
- ②戦時需要＝大戦景気の可能性⇒財政・経済の危機脱出の好機

2、対華21か条要求(1915/1)＝中国・袁世凱政権に提出した強圧的な要求

- | | |
|--|-------------------|
| 1)山東省のドイツの利権の引き渡し(1号) | 2)閩東州・満鉄の期限延長(2号) |
| 3)日本人顧問の雇用、警察を日中合同など中国を「保護国」扱いする内容(5号) | |

⇒中国側の強い反発…日本商品ボイコット(日貨排斥)⇒「国恥記念日」制定に
⇒列強の対日不信、とくにアメリカ

3、大隈内閣の勝利と退陣

- ①1915/3 総選挙に大勝⇒「政友会退治」に成功
- ②大戦景気⇒二個師団増設なども実現
- ③元老らの大隈内閣への手法への反発表面化＝倒閣運動本格化
⇒1916/6 加藤後継工作に失敗、辞任

4、寺内正毅内閣(1916～18)

陸軍・長州閥・山県直系 「非立憲(ビリケン)」内閣

- ①超然内閣・拳国一致を主張＝臨時外交調査会を設け政友会(原敬)らの協力を獲得
- ②中国干渉政策を継続～軍と政府の二重外交に
- ③第四次日露協約…中国の利権擁護のための対米軍事同盟の性格も
- ④西原借款…有力軍閥段祺瑞への多額の借款をあたえ、影響力拡大をめざす

5、石井ランシング協定(日米両国交換公文)

日本への反発を強めるアメリカとの間での中国政策をめぐる妥協
アメリカ…対独参戦のなか日本との関係改善に⇒解釈の差が存在(「玉虫色の決着」)

- | |
|---------------------------------|
| 1)日本は中国に「特殊の利益を有する」ことを承認 |
| 2)日本は「特殊利益によって他国に通商上の差別待遇を与えない」 |
| 3)「中国の領土保全・門戸開放・機会均等主義」を相互確認 |

V、第一次大戦と国民生活の変容～大戦景気がもたらしたもの

1、第一次大戦の経済的意味

- ・輸入の停止 ①大戦不況⇒②輸入代替需要の成立と拡大
- ・輸出の拡大 ①欧州の物資不足 ②アジアへの輸出拡大 ③船運賃の高騰と造船業の隆盛
- ・大戦景気の発生 ①商品価格の急騰、②企業の高い収益、③投資熱、④積極的経営の出現

2、「成金」の時代

- ①「投機」ブーム、②熟練工への需要の高まり、③紡績や製糸のベテラン工女の引き抜き合戦

3、社会構造の変化～農業国から工業国に

- ①農業中心から工業中心へ ②重化学工業の比率の高まり＝繊維業・女工中心の工業からの脱却
- ③都市人口の増大⇒都市問題の深刻化＝食料逼迫、住宅需要の拡大・家賃高騰、住環境の劣悪化

4、インフレの発生～労働者の不満(1917年、内務省警保局の報告書から)

<p>物価、ことに生活必需品が価格暴騰をおこしているにもかかわらず、賃金の増加はこれに伴わないため、一般労働者は戦前と比べて生活上の困難が増していることはおおうことが出来ない。中流以下の国民が生計困難となっている状態は、本年になって、とくに顕著である。</p> <p>にもかかわらず資本主、ことに多数の職工・坑夫を用いる大規模の鉱山・工場は、戦争による利潤がきわめて大きく、巨富を得た資本家が増加していることも大正6年を異例としている。</p> <p>したがって、労働者が資本主に対して反感をいだき、これを嫉視する状態にあることも否定できない事実である。(内務省警保局『大正6年労働争議概況』より現代語訳)</p>

VI、ロシア革命とシベリア戦争

1、「総力戦」と戦争目的の再定義

- ①「総力戦」…「国家の物的・人的資源の一切を戦争遂行のために動員する戦争」
- ②戦争の再定義…「戦闘員と非戦闘員、軍人と文民・一般国民の区別が無意味になり、究極的には敵国民の全面的破壊が目指される」(木村靖二『第一次世界大戦』より)

2、総力戦体制と福祉国家＝「義務の平等と権利の不平等」の問題

総力戦＝国民各層に強制的に国家への協力と負担を求める。

⇒「権利の平等」の実現に＝国民参加型国家への移行

・食料配給制（消費統制&食糧供給の補償）、遺族・遺児の保護・補償

・女性の社会進出

福祉国家・社会国家へ…社会保障・労働者保護・権利拡大などを重視する

⇒「普通」選挙制、さらに女性参政権に

3, 破壊される市民生活と戦局の変化

総力戦＝敵国の生産基盤・市民生活への攻撃を強化

①経済封鎖＝食糧不足の深刻化＝配給制度などをすすめるが

ドイツ＝食料ストライキの発生、休暇から戻らない兵士、餓死者＝762,796人

②無制限潜水艦作戦

③ロシア＝数百万人の餓死者⇒パンと平和を求めるストライキの頻発

4, 1917年、戦局の変化…①アメリカの参戦、②ロシア革命の発生

5, ロシア革命(1917)

帝政ロシアが滅ばされ、社会主義ソヴィエト政権が成立

①連合軍敗北の危機＝東部戦線消滅

②帝国主義的国際秩序の危機＝「無併合・無賠償・民族自決」での戦争終結要求

⇒植民地・被抑圧民族における民族運動を刺激

③各「国内」の危機＝「革命の輸出」⇒社会主義・労働農民運動の活発化の脅威

6, 内乱と革命干渉戦争

英仏米⇒ロシアに戦争継続を要求し軍隊を派遣（革命干渉戦争）

⇒日本にも出兵を打診⇒臨時外交調査会での意見対立・アメリカの動向に注目

①戦局単独出兵論(参謀本部・外相)と ②反対論・協調出兵論(原・牧野)の対立

7, シベリア戦争<出兵>(1918~25)の開始

①アメリカからの限定的出兵の打診⇒8月大規模派遣決定、出兵開始(シベリア出兵)

ウラジオ方面、北満州⇒バイカル以東へ（最大時、7万3000の大軍に）

⇒日本国内で米騒動発生へ

②反革命勢力やチェコ部隊を援助⇒革命派のバクシしい抵抗⇒対ゲリラ戦の様相＝住民虐殺なども

③1918.11大戦の終結⇒戦争目的の希薄化・チェコ部隊の撤兵、20/1 米・英仏軍の撤退

④以後も日本のみ作戦続行＝国際的非難も

VII、米騒動の発生～たちあがった民衆

1, シベリア出兵と米価急騰

2, 富山の女房一揆

①1918(大正7)年7月～富山県漁村女性による米騒動活発化

②新聞記事による拡散（地方紙⇒全国紙）

3, 米騒動の全国化

4, 東京での米騒動

5, 鉱山・炭坑における米騒動

6, 米騒動の規模と性格

①一道三府三八県、500カ所で騒動や不穏な事態発生

直接参加者 70万人(数百万人?)

②居住地域を中心とする騒動

→部落住民が大きな役割をはたす＝水平社運動へ

③労働争議・小作争議の本格化の引き金に

7, 労働争議の広がり

8, スペイン＝インフルエンザ（スペイン風邪）

VIII、第一次大戦の終焉と原内閣

1, 第一次世界大戦の終了

①1918,11 ドイツ革命の発生⇒休戦協定締結

②1919 パリ講和会議

・復讐と補償＝植民地の再分割と多額の賠償金

・多民族帝国（ロシア・オーストリア・トルコ）の解体と民族自決の「実現」

・戦争の非合法化と原因除去⇒集団的安全保障（国際連盟）と労働組合の合法化

2, 「民族自決」権のひろがり

米騒動の全国化

7月以降富山の暴動の広がり

8月以降富山の暴動激化

8月4日地方紙の本格報道はじまる

5日大朝・大毎の富山の報道

10日大朝岡山の暴動を報道

11日大朝・10日の京都の暴動報道

12日 大阪暴動本格化→連日報道

米騒動の全国化

神戸・名古屋・東京などへ

下旬 工場や炭鉱での暴動に

- ①19,3 朝鮮で三一独立運動＝独立万歳を叫ぶ朝鮮民族の示威行動・
→満州・間島地方や沿海州での朝鮮人ゲリラの活発化
- ②19,5 中国で五四運動発生＝日本の旧ドイツ利権の継承に反対する中国の大衆的民族運動
→中国国民党の大衆組織化・中国共産党結成へ
- ③インドやベトナムなど世界で民族運動活発化

3, 原敬政友会内閣成立(1918/9)

政友会による強力な本格的政党内閣

- ①米騒動の全国化⇒寺内内閣退陣
- ②議会の多数を背景に強力な政策を実行⇒軍部・貴族院・枢密院などにも影響力を行使。
- ③国内外の新しい潮流に対応した社会政策の実施⇒アメとムチの政策
 - ・社会福祉的側面＝生活と健康、労働法など
 - ・普選運動には否定的、労働争議への弾圧
 - ・言論・思想弾圧＝白虹事件・森戸事件・大本教弾圧
- ④四大政綱＝教育機関の改善充実・交通機関の整備・産業及び通商貿易の振興・国防の充実
- ⑤外交
 - ・パリ講和会議…西園寺らを派遣。山東省の旧ドイツ利権の獲得を承認させる
 - ・三一独立運動(1919)の徹底的な弾圧⇒斎藤実総督による文化政策＝巡查統治・同化政策へ
 - ・間島出兵(1920)…満州・間島省への出兵
 - ・シベリア戦争の継続…内閣主導での撤兵を模索

4, シベリア戦争の「敗北」

- ①20/1 米・英軍撤退以後も作戦続行→戦線を縮小しつつ成果を残そうとする
・沿海州・満州・朝鮮での民族運動・ゲリラへの影響を懸念、間島出兵
- ②20/3 尼港事件＝日本人の大量殺害事件発生 ⇒北樺太の保障占領＝石油資源などの獲得も
- ③1922ワシントン会議で撤退を表明⇒1922ウラジオを含むシベリアより撤兵
- ④1925年日ソ国交樹立＝北樺太からも撤退
- ⑤戦費約10億円、死者は3000人。

IX、おわりに～日本にとっての第一次世界大戦

1, 二つの戦争と3つの外交戦(山室信一による)

- ①1914年8月の参戦から1925年の北樺太撤兵までの長期戦争。(第一次大戦+シベリア戦争)
- ②日独戦争とシベリア戦争の二つの戦争、日米・日英・日中の中で展開された外交戦の複合
- ③五つの戦争に通底していたのは
 - 1)日本の中国権益をいかに処理していくかであり、
 - 2)アジアにおける覇権を競う日米関係の軋みと連動していた

2, その意味をどれだけ考えていたか・・・?

戦争が変えた世界の変化を理解したのか。

- ①二度と戦争をしたくないという意識の共有は
 - ②多国間・国際協調にもとづく外交については
 - ③民族運動の高まりの意味を理解できたのか、
 - ④総力戦にたいする理解は
- 大戦景気⇒米騒動による日本社会・国民の変化は。
- ①貧しさへの目は＝社会・福祉政策。根本的解決は？
 - ②政治や社会を国民のものにできたのか。
 - ③結局は「抑圧」と「道徳」の押しつけだったのでは。

<参考文献>

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| 木村靖二『第一次世界大戦』 | 木村靖二他『世界大戦と現代文化の開幕』 |
| 山室信一『複合戦争と総力戦の断層』 | 原田敬一『「戦争」の終わらせ方』 |
| 片山杜秀『未完のファシズム』 | 小林啓治『総力戦とデモクラシー』 |
| 坂野潤治『近代日本の出発』 | 江口圭一『二つの大戦』 |
| 千葉功『旧外交の形成』 | 武田晴人『帝国主義と民本主義』 |
| 麻田雅文『シベリア出兵』 | 細谷千博『シベリア出兵の史的分析』 |
| 金原左門編『日本民衆の歴史7』 | 松尾尊兌『大正デモクラシー』 |
| 鹿野政直『大正デモクラシー』 | 中村政則『労働者と農民』 |
| 川島真『近代国家への模索』 | 川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』 |
| 藤原辰史『カブラの冬～第一次大戦期ドイツの飢饉と民衆』 | |